

「すべての人の祈りの家」

マルコによる福音書 11章 12 - 25節

森島 牧人 牧師

今日与えられた聖書は、主イエスの「神の家を立て直す物語」として語られているところで、神殿から商人たちを追い出すという、いささか乱暴と思われる主イエスの実力行使の場面となっています。舞台はエルサレムの神殿ですが、元々イスラエルの人々にとっての神殿は幕屋で、テントのようなものでした。ソロモン王の時代になって壮麗な神殿が建てられますが、後にそれは破壊され、更にまた再建されたのでした。この場面で、主イエスの前にあるのはその後再建され、更にヘロデ王による大増築がなされた神殿でした。

神殿の中央は聖所と呼ばれ、そこにはいわゆる三種の神器、「掟の板・モーセの杖・マナの入っていた壺」の納められた「契約の箱」が安置されていました。その聖所を中心にして、外には成人男性が礼拝するユダヤ人の庭、続いて成人女性用の婦人の庭、最も外側には誰でも礼拝できる異邦人の庭がありました。過越祭のような三大祭りの頃には、この異邦人の庭は遠方からやって来た巡礼者、燔祭用の牛・羊・鳩などを売る店、神殿に捧げるお金を聖別されたものに替える両替商らでごった返していました。

この雑踏の中で主は、動物たちを放し、両替人の台をひっくり返して、「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』ところがあなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった。」と怒り、嘆かれたのでした。ルカ福音書には、過越祭に両親とエルサレムに上った少年イエスが両親の気付かぬ間に神殿に戻って学者たちと議論しながら三日間を過ごされ、それを咎めた両親に、「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」(ルカ 2 : 41 - 52)と言われたように、主イエスにとって<父の家>であるこの神殿には特別な強い思いがあったと思われます。

神を礼拝する場所としての神殿を浄めるために実力行使に出られた主イエスですが、しかしこの主の実力行使の意味には、またはそのターゲットは、実は建物としての神殿それだけではなかったのです。それは私たち人間の礼拝の営み、信仰生活の歩みを整えることにも及ぶと思うのです。つまり私たちの教会の信仰の歩みの中心に、あの日の異邦人の庭のように撤去されなければならないものがある、と。神を礼拝し御心に耳を傾けるはずの私たちの心に、全く別のものが占めている、と。

そんな時、主イエスは実力を行使されます。余計なものを取り除くために、私たちの中に踏み込んで来られ、私たちの礼拝生活や信仰の歩みを立て直してくださるのです。誰にでも、自分が自分の心の中に作って来たものを、立て直さなければならない時があります。しかしその立て直しは、主イエスによってのみ可能なのです。ですから主によって信仰を立て直してくださるという事とは、私たちの生き方を立て直すという事、つまり私たちの神礼拝を立て直す事とは私たちの日常での振る舞いを立て直すという事、さらに私たちが<神の宮>と言われる自分自身を立て直すという事とは、自分の人生の歩み方そのものを立て直すということになるのです。

少年時代に父の家で三日間を過ごされた主が常に神殿に求められたのは、<父の家にいるということは、父の家で父の御心を尋ねながら過ごすということ>にありました。私たちはこのことを見失ってはなりません。二千年前の商人や巡礼者のように、自分の熱心さによって、<父の家>を<私たちの家>にしてしまってはならないのです。

聖書の主の御言葉「この神殿を壊してみよ。三日で建て直して見せる。」を、弟子たちが真に理解したのは、主イエスの十字架の死と復活の後であったと記されています(ヨハネ 2 : 19 - 22)。そして、復活の主の昇天から50日後のペンテコステによって、そこには主イエス・キリストの言葉と弟子たちが一つとなり、神の神殿である、新しい神の家、<主の体なる教会>が誕生したのです。それは正に主御自身がお建てになった教会でした。

主の聖名が刻まれたこの金沢文庫キリスト教会が、神の家と呼ばれる<主の体なる教会>としての群れであることを共に憶えて、そのために生きて行きたいと思えます。

(説教要約 羽入田悦子)